

発達障害をもつ児童への支援の確立、および少～青年期の支援研究

伊藤信寿^{*,1)}、真鍋智美²⁾、白瀧いずみ²⁾、長谷美智代³⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾根洗学園、³⁾浜松市保健所

I. 目的

発達障害を抱える幼児、児童、青年を継続的に支える支援方法およびそのシステムを試行し、その有効性を実証することで、広く地域にその方法とシステムを定着させることにある。そこで今回は特に夏休み等の子どもの長期休暇時における支援と、地域で実行しやすい集団活動の組み合わせに保護者支援のプログラムを加えることで、その有効性を実証しようとするものである。

II. 方法

1) 対象

A 発達支援センターを卒園した小学生 7 名

2) 募集方法

A 発達支援センターを卒園し、在園中に作業療法士による感覚統合療法（以下 SI）に基づいた集団作業療法に参加した子どもの家庭に、センターより余暇支援活動参加の案内と希望申請を送付。7 名から参加希望があり、発達障害をもった小学生 7 名と、そのきょうだい 3 名に対し、余暇支援活動を実施した。そのうち同意が得られ 7 名について分析した。

3) 倫理的配慮

対象者の保護者に対し研究内容と、研究協力の同意が得られない場合も余暇支援活動を受けられることを説明し、全員から署名にて同意を得た。

4) 余暇支援活動の内容

期間：夏休み 2013 年 8 月 28 日、29 日、30 日の 3 日間

春休み 2014 年 3 月 25 日、26 日、27 日の 3 日間

時間は 10 時から 17 時までであるが、参加時間は各家庭で自由とした。

場所：中区にある倉庫を借り、SI で使用する遊具を設定した。



図1 お借りした倉庫



図2 遊具等を設置



図3 ウォータースライダー

活動内容：表1

活動には子どものみが参加した。子どもの送迎は保護者をお願いした。

表1 余暇支援活動の内容（夏休み版）

	8/28	8/29	8/30
午前	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り
昼	昼食（カレー）	昼食（お好み焼き）	昼食（うどん）
午後	おやつづくり（かき氷） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由	おやつづくり（白玉） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由	おやつづくり（ホットケーキ） ウオータースライダー 水遊び（ビニールプール） 自由

表2 余暇支援活動の内容（春休み版）

	3/25	3/26	3/27
午前	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り	SIを基盤とした遊び 昼食の食材の買い物 昼食作り
昼	昼食（たこ焼き）	昼食（ハンバーグ）	昼食（カレー）
午後	おやつづくり（わらびもち） SIを基盤とした遊び 創作 自由	おやつづくり（クレープ） SIを基盤とした遊び 創作 自由	おやつづくり（ホットケーキ） SIを基盤とした遊び 創作 自由

5) SIとは

自分自身の身体の情報や周囲の情報（感覚刺激）を上手く整理して取り入れることが苦手で、混乱している方に対して、遊具や様々な感触を得られる玩具等を使用して、感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法である。例えば、光や音に非常に過敏なため、過剰に反応し落ち着きをなくしてしまう子どもや、触覚が非常に過敏なため、物に触れない、人との接触を避けるような過剰な防衛反応を示す子ども、逆に触覚が鈍麻なために、ボタンや紐の感触がわかりにくく、上手くボタンをはめられない、靴ひもを結べないといった不器用な子ども。あるいは、高さやスピードに対して非常に鈍麻なため、高所のような危険な場所に行きたがったり、過剰に動き回る子どもなど、感覚刺激に対して過剰に過敏あるいは鈍麻なために、問題行動を引き起こしている子どもが少なくない。このような子どもに対して、遊具等を使用して遊びの中で楽しめる感覚を提供することにより、子どもの感覚情報処理機能の成熟を促し、苦手な部分を育てていくことを目的としたものがSIである。

6) 効果判定

子どもの特徴の評価：JSI-R

JSI-R：子どもに感覚刺激に受け取り方に偏りがある場合、その傾向が様々な行動に表れてくることがあります。JSI-Rは、このような行動の出現頻度を調査することで、子どもたちの感覚刺激の受け取り方の傾向を把握しようとするチェックリストです。前庭感覚 30 項目、触覚 44 項目、固有覚 11 項目、聴覚 15 項目、視覚 20 項目、嗅覚 5 項目、味覚 6 項目、その他 16 項目の 8 つの下位検査と 147 の質問項目から構成されている。結果は、「典型的な状態」、「若干の偏りの傾向が推測される状態」、「偏りの傾向が推測される状態」の 3 段階評価で解釈できるように作成されている。

活動の効果の評価：保護者へのアンケート調査

7) スタッフ

著者 1 名と研究協力者 3 名（1 名が 1 日参加）、学生ボランティア 6 名

Ⅲ. 結果

1) JSI-R

表 2 に示すように、参加者全員に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった。

	Green	Yellow	Red
前庭覚	2 名	4 名	1 名
触覚	3 名	2 名	2 名
固有覚	4 名	2 名	1 名
聴覚	0 名	4 名	3 名
視覚	1 名	2 名	4 名
嗅覚	3 名	4 名	0 名
味覚	4 名	3 名	0 名
その他	1 名	1 名	5 名
総合点	1 名	3 名	3 名

Green：典型的な状態、Yellow：若干の偏り推測される、Red：偏りが推測される

表 2

アンケート結果

①参加してお子さんの様子はどうでしたか？

大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
4 名	3 名	0 名	0 名	0 名

②参加してご家族にとってはどうでしたか？

大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	よくなかった
4 名	3 名	0 名	0 名	0 名

③参加する前に、期待していたことは

- ・遊具で遊べること

- ・本人が楽しんで参加できれば
- ・初めての場所、人にどのくらい適応できるか心配で、今後の参考に様子をみたい
- ・楽しい時間が過ごせる場であってほしい
- ・親が安心して子どもを預けられる場であってほしい

上記の期待していたことは達成できましたか

達成できた	ほぼ達成できた	まあまあ達成できた	あまり達成できなかった	達成できなかった
4名	1名	0名	0名	0名

④お子さんの余暇支援活動など、どのようなサービスがあればいいと思いますか

- ・今回のように思い切り体を動かして遊べる場
- ・送迎から支援してくれるサービス
- ・きょうだいで同じ場所で見えてくれるサービス
- ・プール活動を支援してくれるサービス
- ・気軽に参加できるといい
- ・子どもの適性を見出し、継続しての活動につながっていくような形があればいい
- ・公共の施設などは行きたくても行けないので、気にせず遊ばせてあげられる所

⑤また、このような活動があれば参加したいですか

参加したい 7名

IV. 考察・結論

現在、浜松市における発達障害児への支援は、専門機関が少なく、幼児期に対する支援が主となっており、児童期～青年期での支援方法は確立されておらず、その研究は緊急な課題である。実際に浜松市在中の発達障害児の母親は、幼少期においては支援が比較的多くあるが、就学期以降は支援がなく、

困っているということも多く訴えている。発達医療総合福祉センターによると、個別リハを受けられない発達障害児が多いことを指摘している。そのため今回の事業により、地域における支援方法やシステム作りを企画・実施することにより、多種多様な保護者のニーズに応える機会となり、より多くの発達障害の子どもたちと、その家族への支援が可能となる。

今回参加した保護者からは、「公共の施設などに行きたいが、周囲が気になり行けない」、「身体を動かして遊べる場がほしい」といような希望が聞かれた。アンケート結果からも今回の活動は、保護者の希望に沿った支援であったと考えられる。

また、今回の参加者全員に感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される状態であった。この結果から、SIの対象となることが推測される。しかし、SIは子どもの感覚刺激の受け取り方の状態に合わせて、様々な遊具を使用したり、環境を設定したりすることもある。本来であれば、遊具を使用した遊びは公園等でできるが、保護者からの意見にもあったように、公共の場で遊ばせるのに躊躇している。そのため、今回のような支援により、気軽に周囲を気にせず子どもを遊ばせる場の提供が必要である。

今後も、発達障害の子どもたちが、気軽に遊べる、あるいは集うことができる場の提供を検討していくことが重要であると考えられる。